特集

入学者選抜

改革はどこまで進んだか？

高大接続システム改革会議において、改革を進める方針が明示されて以来、
変化を遂げてきた大学入学者選抜。
この7月には「高大接続改革の自主方針の策定」が打ち出された。
日本の入学者選抜のあり方が過去例を見ないスピードで変わろうとする中で
見えている進化の方向性とは、あるいは新たに直面する課題とは、何か。
座談会では、国立・私立大学と高等学校それぞれの視点から、忌憚ない意見を交換いただいた。
また、新たな入学者選抜に取り組む大学の挑戦や成果も取材。
日本の入学者選抜の改革の「今」が見えてきた。

高大接続改革における大学入学者選抜改革とは？

身につけるべき力 ＝ 学力の３要素

（1） 十分な**知識・技能**

（2） それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく**思考力・判断力・表現力等の能力**

（3） これらの基になる**主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度**

（学校教育法第 30 条 2 項）

上記の能力を身につけさせるために、
①高等学校教育　②大学教育　③大学入学者選抜
の３つを、一貫した理念のもと**一体的に改革**を行う

▼

ＡＯ入試（総合型選抜）・推薦入試（学校推薦型選抜）・一般入試（一般選抜）
全ての入試区分で、各大学のアドミッション・ポリシーに基づき学力の３要素を問う入学者選抜に変えていく

トップ座談会

日本の入学者選抜が直面する課題と未来への兆し

ご参加いただいた先生方

早稲田大学　総長	お茶の水女子大学　学長	東京都立西高等学校　校長	司会
鎌田 薫 氏	室伏きみ子 氏	宮本久也 氏	小林 浩　リクルート進学総研所長 リクルート カレッジマネジメント編集長

これまで進めてきた入学者選抜の取り組み状況は――

司会　お茶の水女子大学では新フンボルト入試、早稲田大学では新思考入試と、両大学とも大きく個別選抜を変えられました。導入された課題意識をお聞かせ下さい。

室伏　本学では、AO入試自体は2008年度入試から実施し、学際性、国際性を備えた若い人たちを入学させたいと工夫してきましたが、「新フンボルト入試」は、大学に入ってからの伸びしろを持つ人、さらには社会に出てから伸びる人の入学を期待する入試です。本学に入学してくれる学生の皆さんはまじめでよく勉強して、どちらかというと全てにおいて順調に進めていくタイプが多かったのですが、もっと尖ったものを持っていて、将来特色のある活躍ができるような学生にも入学して学んでほしいという意見が以前から教員たちの間で出ていました。そういった考えに即した形で、2017年度入試から始めたのが「新フンボルト入試」です。

鎌田　本学では、2012年に策定した中長期計画「Waseda Vision 150」の核心戦略として、「入試制度の抜本的改革」を掲げています。これを推進するため、入学選抜に特化した組織「入試開発オフィス」を大学本部に設置し、新しい考え方に基づいた入学者選抜制度「新思考入試」の開発から実施までを行っています。新思考入試は、2014年度入試の「ミャンマー連邦共和国限定 特別奨学金AO入学試験」に始まり、2018年度入試からは「地域連携型」と「北九州地域連携型推薦入試」を新設しました。

新思考入試の狙いの前提として、入学者選抜制度には、大きく二つの目的があると考えています。一つは、良い学生をどう集めるかということについて。もう一つは、入試が受験生にとって「何を勉強しなければいけないか」という最大

のメッセージになるということです。

では「良い学生」とは、何をもって良いと判断するのでしょうか。確かに知識の量は重要な要素ですが、受験の技術だけを磨いて点数を取ることが、人生の最大の目標、つまり頂点となってしまう学生が多いのです。しかし大切なのは、大学に入ってからどれだけ自分を発展させて、社会に出てからも伸びる能力があるかです。さらに子どものころからそうした能力を磨いてきたかどうかを、的確に判定して受験生を選抜していますということを伝えることが重要であると思います。

もう一つAO入試に期待したいことは、高校の3年間で培ったことを正確に評価できるということ。日本の学生は一斉入試を強いられ、離島に住む子などは膨大な交通費をかけて受験に来なければならない。しかし結局は1～2日間の試験で試せる能力しか見てもらえません。この点は高校の先生方もご不満をお持ちなのではないかと思います。新思考入試では、高校の先生の3年間の指導のもとで、本人がどういう夢を持って自己成長を遂げたかの評価を入学者選抜につなげることを期待しています。

新入試はアドミッションポリシーと接続できているか――

司会　早稲田大学はかなりの学部数がある中、大学本部が行う新思考入試もでき、3つのポリシーや各学部のアドミッションポリシーとは、うまく接続されていますか。

鎌田　アドミッションポリシーがないと入試制度は作れないので、これまでもポリシーは公に出していました。ただ、現状に応じた、あるいはこれからの将来の方向性を示す大学全体のポリシーと、各学部・研究科のポリシーを見直して策定中です。

他方で、あまりこと細かく長いポリシーを作るのもいかがなものかなと思います。例えば生命科学は、生物を履修していることと最低限の水準を充足していることは明示的に求めたほうがいいでしょう。それ以外であまり細かく条件を押しつけると、型にはまった生徒ばかりが入学してくることになるかもしれません。大学に入った後、どういう教育をしていくかを示すほうが重要で、高校生がポリシーを見て、自分はこういう側面からチャレンジしたいと自由に発想できる、むしろ大学を変えてやるくらいの気概のある子を門前払いしないようなポリシーの作り方が必要だと思います。

室伏　そうですね、アドミッションポリシーは時代の流れや大学の状況に応じて変えていかなければいけないと考えています。ただ、受験生を悩ませないよう、理念をしっかり打ち出すような改善をしていこうと考えています。高校生に「お茶の水女子大学に行ってこんなことをやりたい」「自分を活かしてくれる大学」と思ってもらえるような努力を続けたいと思っています。

高校の進路指導への影響や課題感は――

司会　これまでは三者面談で、生徒の偏差値に当てはめて進学校を決めるような指導が多かったと思いますが、ミスマッチや意欲の低下なども問題視されてきました。新制度は、高校の先生や保護者、受験生がアドミッションポリシーを理解する必要があります。

宮本　鎌田先生のおっしゃるとおり、入試は受験生へのメッセージの意味が大きい。「うちの大学はこういう学生が欲しい。だからこういう試験をする」というメッセージは、高校生にも分かりやすいでしょう。お二人の話から、こういった入試をもっと進めていく方向性を打ち出されたことはとても良いことだと思いました。各大学が特色を出して、自分の大学で欲しい学生を獲得するための試験を明確に示してもらうのが本来の形だと私も思います。

ただ、一方で進路指導は大変難しくなります。各大学がどういうことを求めているかを、指導する我々も知らならなくてはいけない。さらには、子どもたちが、自分自身をもっと知る必要があります。自分の性格や得意なことを、あの大学なら伸ばせそうだから入りたいと本来はなるべきです。この難しさを乗り越えていかないと、本当の意味での高大接続や大学選びはできません。

司会　今回の高大接続改革の目的は、第一義的にまず高校を変えていくこととされていますね。高校現場ではこれをどう捉えていますか。

宮本　高校教育全体を変えていかなくてはいけないという思いは、現場の先生方にも出てきました。今まで以上に教育の中身を変えていこうという動きがかなり出てきたことと、そういうことに関心の高い管理職や先生方が増えているのは事実です。

ただ、身につけた色んな能力を、大学側が本当に入試で見てくれるのかという不安はあります。結局最後はペーパーテストで見られてしまうようなことはないかという、疑心暗鬼があるのです。

入学者選抜制度の重要な目的、それは、受験生にとって「何を勉強しなければいけないか」というメッセージを明確に示すことです。

――鎌田氏

●2018年度～ 早稲田大学の新思考入試について

――鎌田氏

「地域連携型」は、地方創生が目的です。本学は、中央のひと握りの官僚を育てれば国が良くなるという考え方に対抗して、日本の隅々まで自立した人材を育てて国を発展させるという、在野の精神を理念に開学した大学です。以前は入学者の8割が地方出身者でしたが、現在は1都6県以外の出身者は3割程度です。理由として、地方の子が受験テクニックに長けていない、東京に出したら戻ってこないと不安に思う保護者が多い、地方に就職先がない等が挙げられます。

「地域連携型」は、地方の活性化に強い意欲を持った学生を評価する高大接続型入試です。入学後は、地方に貢献するための基礎的な知見を身につけると同時に、早い段階から地方のインターン等に参加することで、地方の現実を知り、課題を発見してどう解決すべきかを考えます。そして、地方の就職先の正確な情報を学生に提供し、地方の生活までに結びつけるサイクルを作ろうという、入学者選抜に留まらない教育システムです。

また「北九州地域連携型推薦入試」は、基幹理工学部で行う、北九州地域の高校を対象とした指定校推薦入試です。1～3年生は東京の西早稲田キャンパスで基礎教育を受け、4年生は北九州キャンパスで実習を含めた学びを行い、大学院や就職へと進みます。

また、多くの私学は学部ごとに入試を行い、問題の出題から合格者の判定まで学部が不可侵の権利を持っています。しかし新思考入試は、大学本部の入学者選抜オフィスが選抜し希望の学部へ送る形をとっています。これは、入試における、ある種の革命であると考えています。

●2017年度～ お茶の水女子大学の新フンボルト入試について

――室伏氏

新フンボルト入試の募集人数は全学で20名。一次選考を兼ねるプレゼミナールに2日、二次試験に2日、合計4日間と非常に手間暇をかけています。プレゼミナールでは、大学の授業と同じレベルのセミナーを文系・理系合わせて14セミナー開講し、そのうち1つのセミナーを受講したうえで、ミニレポートを提出してもらいます。このレポートとその他の出願書類により総合的に判定し一次合格者とし、二次選考では文系の「図書館入試」、理系の「実験室入試」に分かれて選考を行います。図書館入試は、本学附属図書館の文献や資料を調べ、グループディスカッションや面接を通じて、論理力や課題探求力、独創性等を評価します。実験室入試では、各学科の専門性に即した実験からデータ分析等の課題を課し、高校での学びを活かした課題研究発表等を通じて探求する力をみます。

朝から晩まで4日間の入試は、受験生への負担もあり不評かと心配しましたが、非常に評判が良くて、大学の生の授業や体験した全てのことが、これまで経験したことがないもので、うれしかったと感激してくれて、「不合格だとしても十分勉強できたからいい」という受験生がたくさんいました。

受験した高校生は意欲が高く、自分で問題を見つけ、コミュニケーションを図る力があり、質の高い人を合格させることができました。1期生は今年の4月に入学してまだ数カ月なので大きな差は出ていませんが、よく考えて、自分自身で解決策を探ろうとしており、かなり期待ができると聞いています。これから1年経って、どういう風に成長してくれるか、さらに2年、3年と追跡が必要だと思います。

AO・推薦入試の入学者比率を増やせるか――

司会　確かに、AO・推薦入試で受験生を多面的・総合的に見るには、評価する大学側も大変な手間や時間がかかります。評価する人の育成にもコストがかかりますし、AO・推薦入試を全学生の何割とするかも重要なポイントでしょう。それについて、どのように考えていますか。

室伏　本学は、1学年の定員数が500名に満たない小さな大学です。AO入試以外にも推薦や3年次編入、帰国子女入試等の特別入試で入学する学生は全体の30%います。学内では、特別入試の定員をこれ以上増やさないほうがいいという意見があるので、総数は変更しない方針です。ただ、多様な特別入試をバラバラにやると教員の負担が大きいため、現状の特別入試を整理し、一つに統合することはあってもよいと思います。

鎌田　本学の場合は一般入試の受験者だけで11万人います。それ以外の入試も含めてどんな選抜方法をとるかが、これからの大学入学者選抜のあり方に対して、一定の影響力を持つという自負を持って入試改革を進めて来ました。現在は、AO入試や各種の推薦入試を合わせると約4割ですが、将来的には6割に拡げたいと思っています。

早稲田大学総長は学長と理事長を兼ねており、理事長としての経営的観点からはマンパワーとコストについて意識しています。マークシートだけの入試は人手を節約できます。機械が判定し、効率的に受験生を選別できる。苦情が来ても正解は一つなので、対処しやすいという点では良い方法です。高校生も大学に入るまで、マークシートによる唯一無二の正解を出す教育を徹底的に受ける。しかし、大学教育は「どんな問題にも唯一の正解がある」といった前提をとっていません。「偏差値の高い大学に入れない高校教育は迷惑だ」という保護者等からの圧力に抗しながら考える力を涵養しようと頑張ってこられた高校の努力に報いていくことが、日本の教育を変えていくことにつながると思っています。そのためには、高校での多面的評価を大学入学者選抜に接続するAO入試を拡大する必要があるのです。

将来は、アメリカのようにAO入試の専門スタッフが自分たちの欲しい人材を探しに行き、スカウトしてくるというやり方になっていくべきですが、多くの私大は自力でそのコストを担うことができません。教育改革・入試改革の課題の一つは財政面にあるとも言えるでしょう。

「大学入学共通テスト（以下、共通テスト）」に記述式問題が導入されるメリットと課題とは――

司会　共通テストに記述式問題が導入されます。高校での言語学習や探求的な学習を定着させるための意図がありますが、宮本先生はこれらの取り組みによって高校側に変化が現れると思われますか。

宮本　記述の分量が80～120字程度と十分ではなく、中途半端だと感じています。ただ、子どもたちを見ていると、年々言葉の力が落ちていて、長い文章を読めないし書けない。記述式の導入は、この歯止めとなることを期待する意味合いもあるでしょう。自分の考えを自分の言葉で表現するという当たり前のことを、多くの高校生に意識させることと、教員側もしっかり意識して教えていくという点では、一定の意義があると思います。

司会　お茶の水女子大学でも、新フンボルト入試でレポートをまとめる力を見ていくというお話がありました。国立大学協会は、国立全体の4割しか導入していない記述式をもっと拡げようという動きがありますが、国立大全体としてそういう傾向はあるのでしょうか。

室伏　はい。国立大学協会は記述式を支持する方向です。各大学が行う個別試験に「高度な記述式」を入れようとする動きもある一方、共通テストの記述式問題の活用方法は各大学に任せられています。

今回の記述式導入は意識改革につながります。高校生が「こういうことを学ばなければいけないのだ」と知り、マークシートを指導してきた高校の先生にも意識してもらうことで、教育の方向性が変わると思っています。

最終的には共通テストでは短文しか出題されないことになってしまったので、結果を各大学がどの程度活用できるかは疑問ですが、記述式に対する訓練をすることで、各大学が行う個別試験に対応できる力が身につくことにつながるのではないかと思います。

司会　記述式の導入で、大学への成績送付が1週間遅れることを、私大としてどう見られていますか。

鎌田　共通テストをどう使うかは大学によって異なり、使わない大学もあります。共通テストを一次選抜で使う場合は二次選抜等までの接続の期間が短くなります。特に早い時期に試験を行っている大学には影響が出るので、私大側も対応に苦慮しています。他方で、AO入試の場合、高校の内申書は高校間のばらつきがあるので、最低限の水準の保障が欲しいという希望があります。ところが、基礎学力テストが不採用になりました。また、共通テストの成績送付が遅くなることでAO一本に絞ってダメだった子が他にチャレンジできないという具合の悪いことも起きえます。

私大は入学選抜者制度を多様化していく中で、共通テストをどう取り入れるか。共通テストから完全に離れると、国立と私立併願の受験生は、二通りの受験準備をしなければいけない。こうした高校生の負担を、少しでも減らしてあげることも考えないといけません。

英語の4技能の評価基準とその方法は――

司会　英語の4技能評価の方法として、2023年までは共通テストの英語試験（2技能）が継続し、民間の外部検定試験（4技能）と並列して走ることになりますが、これを高校側はどう見ていますか。

宮本　4技能をしっかり育てていくのはこれからの社会にとっては絶対に必要ですが、民間の検定だけで測って良いかという懸念はあり、国が新しい4技能評価検定を作ってほしかったという思いはあります。高校でしっかり英語を勉強した子が報われる試験を実施してもらいたいのに、現状の民間検定は必ずしもそうと言えません。

共通テストは学習指導要領にも準拠していますし、高校で学んだ英語の力を測るものさしではあるので、少なくとも民間検定よりはいい。併存でいいと思っています。

司会　ただ、共通テストは「読む」「聞く」の2技能しかありません。「書く」「話す」をどう測るかが課題ではないですか。

宮本　大学入試センターも3技能については工夫すると言っているので期待はしていますが、スピーキングはさすがに一斉には実施できませんから、悩ましい点です。

室伏　国が全ての技能を見るのが一番良い方法です。民間の試験における課題として、受験費用がかかるということもあります。家計が厳しい人などが受験できないとなると、今は教育格差が非常に大きな問題なので、それに拍車をかけることになってしまいます。ですから、共通テストはやめずに続けてほしいと思います。共通テストで3つの技能が測れるようになるならスピーキングはやらなくてもいい。話せる人が入って来なくても、話す力は大学できちんと教育します。

鎌田　4技能の試験は、ただ細かく序列をつけるためのものではなく、今後問われる能力だからこそ中学・高校にしっかりと教育課程を確立させることが一番の狙いです。さらに、入学者選抜と大学入学後に行われる教育が、きちんと連続性を持ったシステムとして高校生に提示されていくべきなのです。

私立大学の場合は、共通テストを使わないこともできますから、すでに独自試験の中で3技能をやっている大学は、それを高度化していくのも一つの方法です。本学では、13学部のうち7学部が英語の授業だけで卒業できるシステムになっているので、学部に入って外国人と共に英語で授業をこなしていけるような能力を検証するのに、4技能のテストは不可欠です。ただし、使い方が何通りかあり、1点刻みで序列をつけるのではなく、合否の判定のみとする方法や、6

記述式導入は、
高校生にとっても、高校の先生にとっても
意識改革につながるもの。
すなわち、教育の方向性を変えるものだと思います。
――室伏氏

体験から学び、知識を組み合わせていく力をつける高校教育に変えるとともに、そういう力を、ぜひ大学入試で見ていただきたいと思います。

——宮本氏

段階に区分し、独自試験の点数を上乗せする等、あくまでメインは独自試験という形で利用していく方法がありえます。

一般選抜と共通テストの実施時期に関する課題とは——

司会　新制度では、従来のAO入試にあたる「総合型入試」は出願時期が8月から9月へ後ろ倒しになり、合格発表も実質10月に行われていたのが今回初めて11月以降と設定されました。この実施時期の後ろ倒しについて、大学側はどう捉えていますか。

鎌田　時期の問題は非常に大きいです。AO入試では教員の総力が必要になります。法科大学院の責任者をしていましたが、法科大学院は100％AO入試だったので、入試担当者は夏休みの1カ月間、そのほかの教員全員も数週間、缶詰めになっていました。大学が本気でAOをやろうとすると、夏休みを利用するしかないのですが、夏休みに入学者選抜を行うことは高校からクレームが多く、募集時期すら9月以降とされました。となると、総力をあげての綿密な審査ができない。結局は大学入試センターの試験に頼らざるを得ない状態に追い込んで、1点刻みの選抜を強いようとしているように思えてなりません。

司会　高校側は、学事との関係を含め、どう見ていますか。

宮本　高校にとっても、子どもたちが今までやってきたことをまとめる時間が必要です。形だけのAOや推薦入試では意味がないというのは同意見ですが、夏休みを通して様々な体験をし、最期にまとめる時間が必要だと感じています。

また、早稲田大学やお茶の水女子大学は違いますが、「名前だけのAO・推薦入試」を行っている大学は確かにあり、9～10月には進路が決まり、本当に学力が伸びる時期に全く勉強をしない高校生が相当数います。最後の学力のまとめの時期に勉強をしないで大学に入り、つまずいている。新制度はその点からも時期を勘案したのではないかと思います。

大学入学後の教育内容との接続や検証方法に対する課題感とは——

司会　今までは、AO・推薦入試は学力を問われませんでしたが、新制度はどの入試区分でも、学力の3要素をしっかりと見ていくこととされています。また、一般選抜でも、調査書や本人の記載する資料の提出が求められるようになりました。そこで、高校ではどのように活動書や調査書を作成していくことになりそうですか。

宮本　多様な力を評価していただくのはありがたいことで、評価に足る資料をこちらが用意しないといけません。これまでの高校の活動の中では、必ずしも体系的にまとめてきてなかったのが事実です。

今後は、高校生に意図的に様々な活動をさせ、それをきちんと自分でまとめさせることが求められます。高校教育を質的に向上していく意味でも大事だと思いますが、相当手間がかかるので、大学入試でプラスに見られるのかが気になります。

また、ICT化が進んでいますから、国に調査書等を共通フォーマット化してもらい、各大学がそのまま入試で使えるようにする等の整備も合わせてやっていただきたい。そうでないと、我々も大変だし、評価される大学側も大変で、定着していかないと思います。

鎌田　この点は大学も反省すべきです。今までは高校3年間の教育をきちんと見てきたとは言えません。調査書も合否判定にほとんど使って来なかったように思います。1日か2日の入試で一定の能力だけを試して、入学者を決めればいいというのは、今後は通用しません。

企業が就職試験で、大学4年間でやってきたことを全然見てくれないことが問題視されています。同じようなことを、大学は高校に押しつけてきたのです。これでは負の連鎖が拡大します。

高校で受験シーズンに先生が徹夜で調査書を書くのではなくて、大学側がいつでも高校生のポートフォリオを見られるようなシステムを作るべきです。大学でも、大学の教育でどれだけの効果が出たかを検証することが必要なので、データを逐次記録して、就職の際には、一人ひとりの学生の4年間の成長過程をポートフォリオで見てもらう。大学を出てからもその学生がどうなったか追跡できるデータベースを構築していきます。これからの時代は社会に出てからも、一生学び続けることが求められますからね。

教育改革は、目の前のことだけを改革していては、大きな成果につながりません。日本の将来を支えるための初等・中等・高等教育であるべきで、それを社会につなげ、さらに社会からも戻って来てもらえる高等教育にすべきです。

入試改革や教育改革を経て、大学、高校はどのような人材育成の場に変わるべきか——

司会　高校や大学で学んだことだけで生きていける世の中ではなくなり、生涯学び続けるための教育改革が、今進められているということですね。では、高校教育が大学、社会につなぐ「高大社接続」となるためには、これから高校教育はどう変わっていくべきだと考えられますか。

宮本　子どもたちに社会で必要な力をつけさせることと同時に、大人と接するチャンスを作り、多様な形の体験をさせていくことが必要です。いわゆる知識だけじゃなく、体験から学び、知識を組み合わせていく力をもっとつけていく高校教育に大きく変えていくことが大事です。そういう力を、大学入試でぜひ見ていただきたいと思います。

大学や社会で伸びる子どもをどうしたら高校で作れるのか、そもそもそういう力って何なのかを、高校も大学も一緒にもう一度考えていきたい。高校でここまで力をつけたから、あとは大学でお願いしますと言えるように、さらに社会までつながっていく仕組みを一緒に連携しながら作っていくことが、これからの日本の教育を考えるうえで一番大事なように思います。

司会　大量の受験生をマークシートという効率的な仕組みで大量に評価する入試から、各大学の理念や価値を入学者選抜という形でメッセージとして出し、受験生を多面的に評価するというのはかなりドラスチックな改革だと思われます。

では、入学者選抜と高校教育が大きく変わろうとするとき、受け入れる大学は、どのように変わっていくべきですか。

室伏　本学の場合、多様な入試で色々なタイプの学生が入ってきます。そういう人たちが夢を実現できるところまで持っていくために、教職員が個別の対応をしています。小さな大学なので、少人数教育を看板にしていて、きめ細かい対応が強みですが、今までのように学生をマスとして見ていてはだめだと思うときがあります。手間はかかっても、責任を持って預かった学生を育てようという覚悟を持つことです。またさらには、高校、大学だけではなく、社会も含めて、オールジャパンで子どもたちを育てようという方向性が必要だと思います。

鎌田　本学は人文社会系が多く、大教室の講義による教育が中心でした。大講義は、基本的な知識を効率的・体系的に伝えるには良い方法ですが、これからは大学で蓄えた知識を小出しにしていけば70歳まで活躍できるような時代ではありません。全く想像しなかったような問題に対して、どうアプローチし、何を調べて解決策に結びつけていくかを身につけていることが求められます。さらに、文化的背景の異なる人をどうまとめ、彼らの信頼を得ながら行動していける人間力も要求されるでしょう。

そのために必要なのは、問題に取り組む姿勢であり、それに必要な基礎的な知見や技能、調査分析の手法をしっかりと身につけさせることです。これは大講義だけではできないので、議論し、体験し、知恵を身につけさせていくような教育に変えていかなければならないのです。そのためには、基礎的なスキルと考える習慣を高校までに身につけてもらえるような入試に変えていくことが必要なので、高校、入試、大学の三位一体の改革をこれからも進めていきます。

司会　高校、大学、社会をつないで人材をいかに育成していくかが重要ということですね。本日はありがとうございました。

（本誌 能地泰代　撮影 西山俊哉）

▶カレッジマネジメントTOPページへ戻る